東郷村報

第32号

昭和29年9月5日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場
日向新町富高市
株式會社安藤印刷所
電話64番

牧水祭記念號

牧水祭を迎へて

牧水顯彰會長　小野弘

燦然と輝く太陽を仰いでは五体の躍動を覚え清澄の月を眺めては平和な憩を思ふ。

牧水先生が逝かれて既に二十七年の星霜が流れた。遷り変りの劇しかつたこの年間に於て変らぬものは躍動を感ずる太陽の光りであり平和な憩を思ふ月の光りであつた。

牧水先生の残された魂はこれ等の光りの様に何等の変りもなく私達の心に生氣を與え、時には安らかな憩を與えてくれた。

人間の心に自然と人生を愛する心が失われない限りこの魂は永久の光りとなつて吾々の將來を導くであろう。

私達はこの魂の眞髄に触れて人生の溫かさ豊かさを感得すると共に自からの生活を潤ひのある豊かなものに建設しなければならない。同時に亦多くの人々にもその喜びを頒ちて「人生とは幸せなり」の境地を造りたいものである。

牧水祭

一、期日　九月十七日
一、場所　歌碑前（坪谷）
　　坪谷中学校
一、行事
(一)学童音楽会
　前　九、〇〇～一〇、三〇
(二)歌碑祭
　一一、〇〇～一二、〇〇
(三)講演会
　後　一、〇〇～二、〇〇
(四)短歌会
　二、〇〇～二、三〇
(五)祝賀会
　二、三〇～三、三〇
(六)遺墨遺品展、学童作品展
　前　九、〇〇～後四、〇〇

旅姿の牧水先生

幾山河越えさり
行かば
寂しさの
はてなむ国ぞ
今日も
旅ゆく

牧水先生の作品

紀行文

九州めぐりの追憶」の一節

先に矢嶽附近の高山鉄道を説いたが、汽車が日向路に入つて山之口、青井岳駅あたりを走る附近がまた甚だ山深い。此処をば高山でなく山中鉄道と呼びたい。汽車は多くは山腹を走り、周囲に原始林らしい森林を見て過ぐるのである。青井岳駅で降りた猟師らしい二人の男がムジナに似た獣を背負ひ、藁の笠を冠つていたのなども土地に似つかはしい光景であつた。

其処を通り過ぎれば日向路の汽車は全部平地を走るのである。宮崎までは乾いた平野、其処からは海に沿ふ。海に沿うた中にも高鍋から美々津、岩脇附近の海岸は松林の明るさ美しさ。磯から浜の曲折に富んだことなど、眼に残る景色である。太平洋の遠いはてのうす紫に光るのなどもわたしには思ひ出深いものがあつた。

岩の間を這ひて歩く、はだしで、笑ひて浪とわれと

鵜が一羽不意にまひたちぬ、岩蔭の藍色の浪のふくらみより

水平線が鋸の刃の如く見ゆ太陽の下なる浪のいたましさよ

わが窓のつめたさよ、海はけふにいくたびか色を変へけむ

とある雲のかたちに夏をおもひ出でぬ三月の海のさびしき紫紺

手に触るゝわびしき記憶にがき悔、岩をめぐりて浪ぞむらがる

たらたらと砂ぞくづるゝわが踏めば砂ぞ崩るゝ、藍色の海の低さよ

嬉し、嬉し、海が曇る、これからわたしの身体にもあぶらが出る

など、この美々津から岩脇あたりの海岸で作つたものであつた。

都農町の姉の家の裏木戸を出ればたひらかな肥えた畑で、其処に立つと真北に尾鈴山が仰がるゝ、その山の向う麓にわたしの生れた村はあるのである。少年の頃、やゝ久しく此処に客に来ていたことがあり、毎日この広い畑から尾鈴山を望むのを喜んだ。春の深い頃でもあつたが、煙つた畑、おぼろ〳〵に霞みそびえた尾鈴山の姿がしみ〴〵と思ひ出さるゝ。その心を語らうとして妻をその畑中に誘うたが、伝えかねぬる気持の様に思はれて嘆んだ。

丁度母も姉もあとからついて来た。姉は野菜つくりが好きで、その時もたか菜、かぶら菜、しゆんぎく、ほうれん草等其処一面にみづみづしく生ひたつていた。老若三人の女たちの間にはひとしきり野菜の話がはずんだ。

延岡から東、別府までの汽車はわたしには初めての線路であつた。いゝ景色があると聞いていたのであちこち眺めたいと思うたが、都農の義兄の家での接待酒が利いて、ともすればうとゝ眠りかけた。然し、冬枯の赤錆びた山肌や、多分祝子川（はふり川と訓む）であらうと思はるゝ川のやせた川原が遙か目下に流れていたりするのが折々眼に触れて、静かな車中であつた。正午一寸覗いてみると食堂車が空いていたので、母、二人の姉、妻を其処に誘うた。丁度汽車は日当りのいゝ山腹を走つていた。枯葉をつけたまゝの櫟林が明るく車窓に見えた。他に客がないので、そして汽車の食堂といふものが珍しくもあつたので、年寄りの女たちもお喋舌をしながら幾らか盃を重ねた。

書簡

五月二十一日沼津市千本浜より日向国河野すえ様宛（手紙）

姉上様、また御無沙汰していまして、すみませぬ、このごろ、ずつと旅行ばかりしていて、殆んどうちにはいないのです。先日は大好物ふたしな御送り下されありがたうございました、たいせつに保存しながらいたゞいてゆくことにしますこちらから何もさしあげずすみませぬ、どんなものがいゝでせう。浅草海苔などおすきでせうか知ら、母のことともいつもおせわさまでありがたう存じます。つい先日金を少しと手紙とを送つたのでした。

手紙にはあなたもいつまでもこちらに気をもませないで、世間のならはしどほりに、せがれのところに来てくれたがいゝではないか、しづあねのことはもうたいていでみきりをつけてふたり娘たちにまかせておしまひなさい。あなたがさうしておいでるから娘二人はいつまでものんきにあまえているのです。といふ様なことをかいてやりました。ところがその返事がけさ来ました。よくわかつたがまだよくかんがえてからしつかり返事するとのことでしたまつたく母にいつまでもあちらに居られたのでは、いろいろ心配でいけませぬ、しじゆう家にでもをるのならようございますけれど、よくあちこちと歩いていますので、いつどんな電報が来てもオイソレと間にあはぬことになりはせぬかといつも気になつてをります。また金にしたところが、こちらに来ていてさえもらへばりつぱな御隠居さまでたゝゆかれますけれど、御存じのとほり、私などは月々きまつた月給をとるでなく、また現金をいつも持つてをるといふのではありませぬので、たとへわづかづゝにせよ、きまつてお送りするといふことはかなり困難なのです。さういふことをかしいようですけれど私どもの生活はとにかく他とはちがつていますので、まつたくの話なのです。

なんとかあなたがたからもすゝめて下すつてしづ姉のしまつをつけて下さつた上母をこちらによこすやうにして下さいませんか、折入つておねがひします。

この六七月のころ、九州めぐりをやるつもりでしたが秋にのばしました。九月の末か十月になりませう。家をつくる金をこしらへるための旅行なのです。ゆくとすれば家内をつれてゆきます。この前ののんきな旅とちがつて、非常に忙しい旅行ですが、とにかくお目にかゝります。喜志もたいへんたのしみにしています。あなたがたも一度こちらに来て下さい。この秋までは右申した用事でいつも旅行ばかりしていますが、秋がすぎればひまになります。家もたいていそれまでには出来ませう家といへば坪谷の家のしまつについてもおはなししたいのですけれどあまり長くなりますから、これでよしときます。

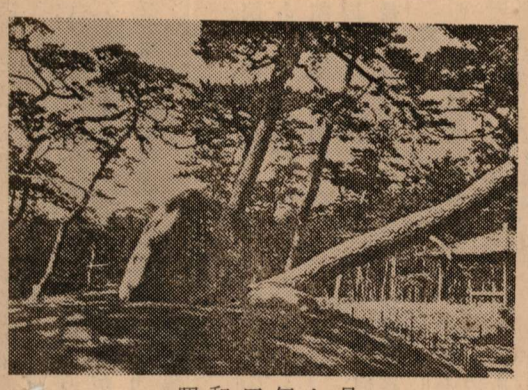
兄上、文一君初め、はる子にもよろしく申して下さいオヤオヤまだ赤ちやんのお祝ひをも申しませんでしたね、ごめん下さい。

牧水

五月二十一日

すゑ姉上様

どうか、おからだをおだいじになすつて下さい。わたくしもこのごろだんだん日向の人たちのことが気にかゝるやうになりました。わたくしも今年は四十一の前厄です。



昭和四年七月
沼津市千本松原に建てられた
「幾山河」の歌碑

櫻

牧水

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山櫻花
うららうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花
いついつと待ちし桜の咲きいでて今は盛りか風吹けど散らず
萌えたてるうすべにの葉のゆたかにて花いまだしき山ざくら花
春は来ぬ老いにし父の御ひとみに白ううつらむ山ざくら花
咲き満てる桜のなかのひとひらの花の落つるをしみじみと見る
山桜咲けりともなし明けがたのこのひとときの空のあかりに
萌えたてるうすべにの葉のゆたかにて花いまだしき山さくら花
山ざくら散りのこりゐてうす色にくれなゐふふむ葉のいろぞよき
花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花

童謡

秋のとんぼ

茅萱のうへに
ほろほろと
きいろい
胡桃の葉が落ちる
茅萱の蔭から
ゆめのよに
赤い蜻蛉が
まあひ立つ
とんぼ可愛や
夕日のさした
胡桃の幹に
行てとまる

天の河

天の河原を誰渡る
天の河原を誰渡る
千年万年昔より
まだまだ誰とて渡らない
千年万年末かけて
まだまだ誰とて渡るまい
天の河原の美しさ
天の河原の美しさ

落栗

栗の寝姿
かはいいな
己が落葉の
その上に
ころりころんで
眠つてる
栗のねすがた
かはいゝな

野焼山焼

野焼　山焼
煙があがる
あがる煙の
末々かけて
霞む御空に
雲雀があがる
あがる雲雀の
末々かけて
姿見えない
声ばかり

酒　牧水

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり
秋かぜや日本の国の稲の穂の酒のあぢはひ日にまさり来れ
かんがえて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ
酒のべばなみながるるならはしのそれもひとりの時に限れる
かなしみにこころもたゆく身もたゆく酒ものうし泣きぬれてゐむ
ものいはぬ我にすすむるうす色の昼のひや酒妻もかたらず
時をおき老樹の雫おつるごと静けき酒は朝にこそあれ
ゆふぐれを労れて酌める一つきの酒はなかなかさびしくぞ酌む
鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寝む
静心しづまりかねつ酒持ちて秋山さして出でゆく

富士

より来りうすれて消ゆる水無月の雲たえ間なし富士の山べに
冬寂びし愛鷹山のうへに聳え雪ゆたかなる富士の高山
なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士が嶺の夕まぐれかな
をちこちの野火の煙のけぶりあひてかすめる空の富士の高山
雲はいま富士の高嶺をはなれたり裾野の草に立つ野分かな
冬雲のそこひうづまき上かけてなびけるうへに富士は晴れたれ
綿雲の湧き立つそらに富士か嶺の深雪寂びつゝかがよへる見ゆ
紫に澄みぬる富士はみじか夜の暁起きに見るべかりけり
富士が嶺にひと夜に降れる初雪の峰白妙に降りうづめたる
松原のしげみゆ見れば松が枝に木かくり見えてたかき富士が嶺

隨筆

鮎釣に過した夏休み

わたしは、日向うまれである。むづかしくいふと宮崎県東臼杵郡東郷村大字坪谷村小字石原一番戸に生れた。明治十八年八月廿四日のことであつたさうだ。村は尾鈴の北麓に当る。そこの溪間だ。

この溪は山陰村にて耳川に注ぎ、やがて美々津にて海に入る。山陰村より美々津港までの溪谷美（といつても立派な河であるが）は素晴らしいものであるが、辺鄙のことゝて誰も知るまい同地方特産の木炭の俵の上に乗せられてこの急瀬相次ぐ耳川を下ることは非常に愉快である。下り終ると美々津の港の河口に日向洋の白波の立つているのがそこの砂浜の上に見える。小さい時山奥から出て来てこの浪といふものを見た時はほんとに驚喜したものであつた。

さうした、山あひの村のことゝてわたしの七才八才のころには普通の小学校はまだできていなかつた。在るにはあつたがいはば昔の寺小屋の少し変つたやうなものであつた。

うやむやのうちに尋常小学校を過し、十才のとき、村から十里あまり離れた城下町である延岡に出て高等小学校に入つた。そして、やがてその土地に創立された延岡中学校の第一回入学生として入学した。

だから、わたしは小学生の時から（大抵は中学校か専門学校になつてであるが）「帰省」を味はつた。冬と夏との休暇、それを待ち受けて行く喜び楽しみのなんと深いものであつたか十才や十一二の身でわたしはその十里の道を終始殆んど小走りに走つて家に帰つた。延岡から富高まではそのころでも馬車があつたが日に幾度だか、或はまた出るか出ないか解らない状態であつたので、少年の気短にはそんなものに頼つている余裕がなかつた。ひとりで走つた方が気持がよかつた。

冬休みは短かつた。一週間か十日ぐらいのものであつたろう。その間にお正月があつたりして、何か知らわけもわからずに過ごしてしまふのが常であつた。だが、夏休は永かつた、ひと月であつた。このひと月の間をば殆んど毎日釣をして過ごした。

父も釣が好きで、よく一緒に出かけて行つた。たゞ父の釣はあゆつり（郷里ではあゆかけといつていた）だけであつたがすきな割には下手で、却つて子供のわたしの方がいつも多く釣つていた。この父は愉快なる人で、性質は善良無比、そして酒ばかりを嗜んだ。

また夏休みの話だが、夏休みに帰つてわたしはいつも二階に寝ていた。そして朝寝をしていると、父は、そうつと幾度も階下から覗きに来た。そしていよいよとなると

「繁、起けんか。今朝、いゝぶえんが来たど」といつた。ぶえんとは多分無塩とでも書くのであろう、氷も自動車もなかつた当時にあつては、普通の肴屋の持つて来る魚といへば塩物か干物に限られていた。中に一人か二人の勇ましいのがあつて凉しい夜間を選んで細島あたりからほんとうの生魚を担いで走つて来る。彼らはもう仕入をする時からどこには何をどれだけ置いとくときめてやつて来るのだ。だから走りつく早々台所口にかねてきめておいた分を投げ込んで置いてまた次へ走る。

乱暴な話で、こちらではもう買うも買はないもないのである。

父は飲酒家の癖で、朝が早かつた。誰よりも先に起きて囲炉裡に火など焚きつけていた。そこへその無塩売りが来る。彼れはそれを待ち受けていて、やがて自身で料理にかゝる。刺身包丁の使ひぶりは彼の自慢の一つであつた。そして綺麗に料理しあげて、膳をこしらへて、台所の山に面した縁端へそれを持ち出し、サテ、わたしの起きて来るのを待つのであるが。渋々私が起きてゆく、父はちやんと用意してあつた膳の上から一つの盃をとつて

「マ、一ぱいどま、よかろ」といつてさす。年令僅に十幾才の悴を相手に彼はいかにも満足げに朝の一時間だか二時間だかを過したのである。

その父逝いて十五年、悴もいつか父に劣らぬノミスケとなり、朝晩ふらふらしながらかうしてたまたま遙かに故郷のことなど思ひだすとおのづから眼瞼の熱くなるのを覚ゆるのである。

日記

明治三十七年（早稲田大学一年）

十二月二十五日　晴

午前中「金色夜叉」に耽り居り。正午頃、久しぶりに海野来る。桶町の薬屋とやらむの奉公、つとめ兼ぬれば他に何か然る可き仕事を見出してよと、せまる、ともかくもすべければと夕方まで話して別れぬ。

夕方、故郷の父より来信あり、いろいろと優しき言葉の、そゞろにうち泣かるめり。尙ほ小包より、椎茸に「かち栗」たくさん送りたまひぬあゝ親情の何とや云うべき、

夜射水君と四方山の物語九時すぎて寝てありしに、高橋君不意に飛び込んで泊つて行く

（受信）故郷　故郷より小包

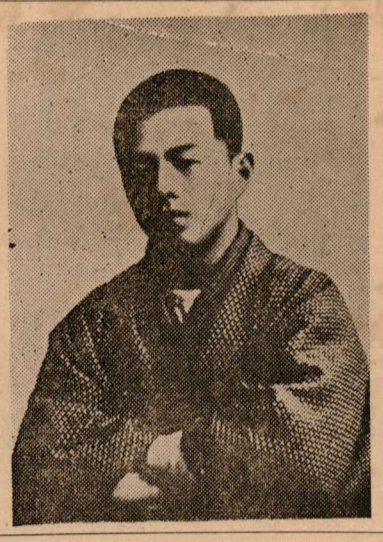
十二月二十六日　晴

高橋君と十時近くまで床にありて、起き出づれば空の曇りたり、これはと眉をひそむる間もなう、漸くに晴れ行きぬ

飯をすませて、牛込局に金を受取り絵葉書なんど買ひもとめて、帰ればまた昼食二時なりけむ。それを済ませて、故郷よりの贈り物椎茸持ちて鶴巻町の内田さまがり訪れ行けば年末の、さも忙しさうに手もち無さたの事

夜は「金色夜叉」読み町通れば、暮のさまの、さすがに、うちどよみて

（発信）故郷



【若き日の若山牧水先生】

明治四十五年

六月十日

この朔日から急に起つた腹痛と下痢とがなかなかにとまらない。まるつきり病人になつて寝ているのが不愉快ゆゑ多少不養生をしないでもないが、さればとて相当の手当はしてゐるのである温泉に行つて温めたならばと思ひ立つて行くことにする。

途中、もと沼津の稲玉病院在住中始終かゝりつけであつた塚田静保君が先頃三島町に転じて開業中なのを訪ひ診察を受け薬を貰つて長岡温泉橋本屋にゆく

動いたためか、じかじかと痛む。馴染の女中が心得てつけて来たお銚子を断り兼ねて飲む。ビールはいけないが、熱いのならば却つていゝ様である。

おなじく十一日

つとめて湯に入る。よく温まるが、同時にのぼせていけない。大きな湯あがりを取り寄せ湯槽に添うて臥しながらタオルを輪の様に巻いて腹部の上に載せ、片手に小桶を持つて断えずその輪の中へ湯を注ぐ。三十分も続けてゐると、其処だけ赤黒く染まるまでにあつくなる。

午前一度、午後二度、夜なかに一度、これを繰返すことにした。

おなじく十二日

昨日から始めた方法がたいへんにいい様だすいてゐる時は一時間位ゐもゆつくりとさうしてあたゝめるのだが少しものぼせない。そして痛みも次第にとれてゆく。

疲れが出て、湯に入つてゐない間は、たゞうとうとと寝てすごす。降りつ晴れつ、寝ながらに見る向うの松山には日がさしたり、霧がかゝつたりしてゐる。折々松蟬が鳴き、頬白の声が聞える。

昭和三年

六月一日

昼も夜も何といふことなく夢の様に暮してしまつた不意に斯うして珍しい所へ来てゐる事を考へて見るとまつたく夢の国に来ている様なものであつた。

雉子頻りに啼き、背戸の松には鵲がかしましかつた。

六月十八日

もう一日休むことにした宿の部屋からやや左手前面に水晶峰といふのが聳えてゐた。日光の具合などでは本当に水晶の山かとも思はるる位ゐにうす紫に霞んで見えた。思ひがけなくその山から郭公の声の落ちて来るのを聞いた。

うち仰ぐ岩山の峰に朝日さし起りたるかも郭公の声

筒鳥も啼いた。

長詩　雨三題

静かにさせる日かげのなかに
砂をまくごとき
雨が降る
虫ばみて黄いろき
九月の桜の葉は
驚きて散り乱れ
雨はさらにその木の蔭の土を打つ
土　うす黒く乾きゐて
こほろぎの子の
いちめんにとぶごとく
一つ一つに粒だちて躍り上る
おお過ぎゆく雨
過ぎゆく雨
あとに静けき日影を残して
荒く明るく過ぎゆく雨

○

わが椅子の側なるガラス戸に
なめに飛び来てふりかかる雨は
一つ一つ烈しきひびきを立て
一つ一つましろき縞をなして流る
その時ドストイエフスキイの伝記を読みさし
膝の上に伏せたる我は
故知らぬ昂奮に
瞳さへ重きを覚えき
おお降るよ雨は
一つ一つひびきを立て
一つ一つ縞をなして流る
わが側のひややけきガラス戸に

○

また落ちて来たか雨よ
毎日毎日降られるので
お前好きの俺も
実はうんざりしてゐたのだ
が雨よ
降るなら降つてもいゝ
お前が降れば
お前の降るのをながめて
俺はかうして何もしないで
怠けて居らるる様な気がする
晴れてみろ
皿のふちを追はれた蠅のやうに
何か知らぬが
右往左往に飛ばねばならぬ
心持だけでも
俺はそこらに飛ばねばならぬ
おゝおゝ
降る降る
木も濡れ石も濡れ地も濡れた
たうとう本気に降り始めたか雨よ

みにくいアヒルの子と牧水先生

越表小六年　橋口栄子

「――今、私達がお目にかけようとする劇は、一羽の白鳥を例にとつて、その幼少時のみにくい姿を演出しようとするものです。それは、こんなへき地の貧しい郷土から、やがて一流の芸術家が、文学者がまた、真に土に生きる日本一の農民が、世に出ることの前ぶれかも分りません。いや、どうしても出たいものです。出したいものです、この私たちの中から――。この私の身のまわりから――」と。

そんなわけをもつて、私達は「みにくいアヒルの子」の劇をはじめた。

以下略

雨が、ざあざあふつている。

私は、窓ぎわにこしをおろして、

「しらあとりは、かなしいからずや、そらのあお、うみのあおにも、そまずただよう。」

と歌つていると、ふと、五年生の時に、学芸会でした『みにくいアヒルの子』という劇のことを思い出した。それは、その劇をする時、私は幹子さんと、この牧水の歌をうたつたからなのだろう。私は、思い出すと、あの劇がたまらなくすきなのだ。そして、今もその劇がありありと眼先にうかんでくる。

「みにくいアヒルの子」は五年生全員でする劇であつたが、劇をはじめる前に、私は場内のお客さまにむかつてあいさつをした。その「演出の意味するもの」の中には、こんなことばがあつた。

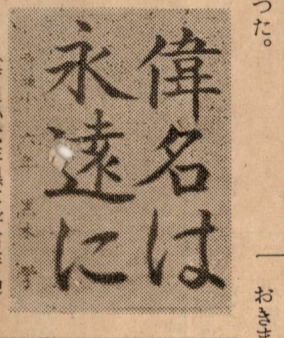
「――その昔、郷土が生んだ歌人、若山牧水の歌にこんな歌があります。

白鳥は悲しからずや空の青
海の青にもそまずただよふ。

今さら私が申し上げるまでもなく、皆さま方はよくごぞんじのことと思います

自分の人生を生ききるのに芸術のもつ美しさをひたすら求めて、世の中の俗にもそまらず、自分の信ずる一すじの道をまつすぐに歩いた歌人若山牧水が、自分を白鳥にたとえて歌つたものと思われます。あの白鳥の姿こそ芸術家の姿だつたのです。――」と

また、こういうことばもあつた。



（寺迫小六年黒木学君作品）

編集後記

△牧水先生の二十七回忌を迎えますにあたりこゝに「牧水祭記念号」をお贈りいたします。

△記念号は先生の作品を掲載することにしました。

△「記行文」「随筆」「小品」書簡などは郷土に近い作品をえらびました。親しみ深く読んでいたゞきたいと思いまして。

△桜、酒、富士は御生前最も愛されて詠まれた歌で牧水歌集「桜、酒、富士」より抜萃しました。この歌集におさめられている桜の歌は一四九首、酒の歌は三一五首、富士の歌は一一〇首のようです。

△先生の多面な御精進を知つていたゞきたいと思つて童謡と長詩をものせておきました。

△この掲載した作品をとおして先生の偉業を偲んでいただき歌の聖地東郷村を讃えていただけば幸いだと思つています。